

夢見先師



寝苦しくて目を覚ますと、僕は窮屈な箱のようなものの中にいた。  
大人一人がぎりぎり入れるくらいの狭い箱の蓋をこじ開けて外に出る。

——どこだろう、ここは？

薄暗い倉庫のような空間。広さは体育館と同じくらい。そこに僕が入っていたもののと同型のカプセルが所狭しと並んでいる。その数は百……いや、それ以上かもしれない。

昨日の夜、自分の部屋で寝たはずなのに、どうしてこんなところにいるんだろう？  
窓がないので今が昼なのか夜なのかすらわからない。

眠ったのは午後の十一時頃だから、日付を越えているのなら今日は中学校の入学式のはずだ。  
こんなわけのわからないところにいる場合じゃない。

今、どうするべきなのか。

寝起きであることもあり頭が回らない。体は冷え切っているし、何から考えていいのかわからない。

外に出よう。出口はすぐに見つかった。開けようと試みるが、外から施錠されているのか開かない。閉じ込められている……？

何故自室からこんなところに移ってしまったのか、そしてどうしたらここから出られるのか。それらの手掛かりを見つけるため倉庫の中をさまよった。

しかし、倉庫の中は照明もついていないし、カプセルが並んでいてそこから床を這い天井に向かって太いケーブルのようなものが伸びているということ以外、何も得られなかった。

このカプセルは何なのだろう。ひょっとしたらここは誘拐犯のアジトで、カプセルの中には僕と同じように人が閉じ込められているのかもしれない。

僕が目を覚ましたカプセルまで戻り、隣のカプセルから調べてみることにした。窓はついていないので中は見えないが、プレートがついていて、文字が刻んであることに気付いた。

プレートには僕の名前と、六年前の日付が刻まれていた。

何だこりゃ……？

僕の入っていたカプセルを調べてみると、やはり同じ場所にプレートが取り付けられてありそこには今日（眠ってから日付を越えていないのならば、明日になる）の日付が刻まれていた。

そして、反対側のカプセルを見てみるとそちらは三年後の日付が刻んであり、その隣はさらに三年後の日付になっている。全部名前は僕のものだ。

そのカプセルより先は置いていないので、六年前の日付のカプセルよりさらに遡ってみた。そこからいくつか僕の名前の刻まれたプレートがかかっており、それより先は知らない人の名前が続いていた。違う列に並んでいるカプセルも、まれに十体ほど連続で同じ名前が続くこともあったが、ほとんどは三、四体ほど続くと別の名前のカプセルに変わっていた。

カプセルをこじ開けようとしても、どれも電子ロックがかかっていて開くことは出来なかった。僕の入っていたものだけ電源が落ちていたようなので、幸運にも何らかの事故で偶然ロックが開けられたのかもしれない。

だんだん体に熱が戻ってきて、頭も働くようになった。考える……何故ここにいるのか。そして脱出の方法も考え出さなくてはならない。

その時、この風景が幼少の頃に見た夢の中にそっくりだと気がついた。

あれは確か小学校に入学する直前だっただろうか。

僕は、奇妙な部屋の中で目覚めた。知らない大人たちに起こされた部屋がこんな場所だった。カプセルがたくさん並んでいて、それが虫のサナギのようで気持ちが悪く、親の姿が見えず心細かったこともあり泣いてしまった。泣きだした僕は大人たちに注射をされたんだっけ。

注射も怖くて散々暴れたのだが、だんだん意識が薄れ、気付いたら母の胸の中だった。

「もう小学生になるんだから泣かないんだ」なんて言っていたくせに、悪夢の恐怖に泣きながら甘えてしまい恥ずかしかつたのを覚えている。

あの夢を見た日から両親が急に優しくなったので非常に印象的だったものだ。それまでは一人で遊びに行っていたのに、あの日を境に両親は異常とも言えるほどに交通事故に過敏になり、僕を車道に近付けなくなった。

だから、僕は「夢の中で知らない大人にさらわれたから、現実ではそんなことがないように優しくなったのかな」と考えた。

あれは夢でありながら現実世界にも影響を与えたと錯覚してしまうような……とても印象的な夢だったんだ。

そう、この場所は幼き日に見た、あの夢の光景にそっくりなんだ。

あの時も、僕はこの部屋で目覚めたんだ。あれは、夢じゃなかったのか？

そんなことを考えていたら、部屋の出口の方から電子ロックを解除する音が聞こえ、誰かが入ってくる気配を感じた。

僕は嫌な予感を感じ、カプセルの中に戻ると蓋を閉じた。

どうやら、二人の男が入ってきたようだ。完全には閉じていない蓋の隙間から二人の会話に耳を澄ませた。

「本当に焼却処分しちゃっていいんですか？」

「ああ。全部頼む」

「金持ちや、その子供のバックアップなんでしょ？　うちが訴えられても責任とれませんよ？」

「余計なことは考えないでいい。これは全部旧型なんだ。旧型はバックアップデータをとる際に肉体から脳波まで全て複製して保存しなくちゃならなかった。冷凍保存で何十年も残していたら場所をとるし、人権団体もうるさいからあまり大っぴらに使いなかつたんだよ」

「らしいっすね。うちに処分を頼むくらいなんだからヤバイもんなんでしょ」

「新型はこんな風に複製品を冷凍保存しなくてもデジタルデータとして保存出来るようになったんだ。オリジナルが病気になったり、不慮の事故で亡くなったりした時にデータから肉体を復元すればいい。ここにある在庫も全部デジタルデータに変換済みだ」

「へえ、それは便利っすね。いつか金持ちだけじゃなく俺みたいな貧乏人もこれが使えるようになったらいいのに」

「一般まで普及するのは時間がかかるだろう。さあ、無駄話はここまでにして、処分のほうを頼む。現在の法律では複製品の抹消は殺人罪になってしまうからな。証拠の残らんように頼むよ」

「任せといてくだせえ。ぱっと見た感じこの設備なら、うちの機械なら跡形もなく焼却出来ますから」

「頼もしいな」

そう言うと二人は部屋を出て行った。再び電子ロックがかかる音がする。

バックアップ……？ 何のことだろう？

あの人たちには聞かないといけないことがたくさんある。

カプセルの蓋を蹴り開き、外に出る。すぐに出口まで向かうが、完璧に施錠されていてドアは開かない。

「開けてください！！ 開けて！！」

ドアを叩くが、反応はない。彼らはもういないのだろうか？

「開けて！！」

ガンガンとドアを叩く。

「熱っ！！」

ノブに手をかけると、凄まじい高熱が伝わってきた。

まさか……

「開けろ！！ 誰か！！」

「開けろ！！ 助けてくれ！！！！」

「助けて！！ 誰か助けて！！ 開けて！！」

「助け……」

「……………」

ああ、もう駄目だ。部屋の中にも炎が入り込んできて……

意識が……

【P'z books】 夢かまことか

<http://p.booklog.jp/book/51403>

著者：さとし

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sats/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51403>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51403>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ